

いしかれん だより

第16号
1996. 2

石川県精神障害者
家族会連合会
〒920 金沢市南新保町ル3番1号
石川県精神保健福祉センター内
TEL (0762) 38-5761
FAX (0762) 38-5762

巻頭言

「家族会に期待するもの」

石川県精神保健福祉センター

所長 加藤 佐敏



新年を迎え家族会の皆様いかがお過ごしでしょうか。昨年を振り返ってみますと、重大な災害や事件が相次ぎ、概して暗い一年で、野茂投手の活躍が唯一明るいニュースではなかったでしょうか。

家族会関係では、作業所が一挙に5カ所増え13カ所になったことは嬉しい出来事でした。国の精神保健関係では、精神保健福祉法が改正され、年末には平成14年までの社会復帰施設の整備目標を設定した障害者プランが発表され、総務庁が厚生省に対して社会的入院の早期解消の促進策等の勧告もだされました。県内においても障害者計画が現在策定中で、今年度末に公表されます。この計画の策定には石川県精神保健協会が県の委託を受けた、社会参加ニーズ調査が基礎資料になりました。

さて、今年は石川県精神障害者家族会連合会の大きな事業として、全家連北信越ブロック研修会が小松市で行なわれますが、地域家族会が主体となって行なわれるのは初めてのことで素晴らしいことだと思います。県内の家族の皆様はふるって参加されることを望みます。

これまで精神保健福祉センターとして、石川県精神障害者家族会連合会や地域家族会への仕事を通じて、皆さんの活動をみてきましたが、年々益々活発になってきていることは誠に喜ばしいと思っていますが、今後のさらなるご発展

のために、あえて家族会に期待する以下三つのことを言わせていただきます。まず、第一点目は会員数を増やしてほしいことです。数が多ければ、物を言った時の重みが違います。もちろん関係機関の支援が大切ですが、皆さん自身あらゆる機会に積極的に仲間を増やす努力をしてほしいのです。現在300名余ですが、全国平均からかなり低いと思います。新潟県は約4,000名、富山県は約1,300名です。また他の障害者では、石川県精神薄弱者育成会の会員数は約2,000名、単会である金沢手をつなぐ親の会の会員数は約700名いるといわれています。具体的に数を増やすには地域家族会の活性化が必要だと思います。また病院家族会の設立をお願いすることも必要です。入院中に家族会を知れば退院して地域家族会への加入が望めます。絶対数が増えればそれにともない若い人が増え、家族会員の高齢化が言われていますが、その解決の一助となるでしょう。第二点目は家族会の役割を再認識して欲しいことです。同じ悩みを持つ人同志が助け合う自助グループとしての役割です。定例会を行い体験発表を行うことが出発点です。家族会員が家族会員の話を傾聴することで、ストレス解消するのです。これをピア・カウンセリングと言います。第三点目は家族会が勇気をもって声をあげることです。当事者の声は非常に重みがあります。平成5年障害者基本法に改正され精神障害者が障害者と認められ、その結果昨年の法改正で他の障害者と横並びとなりました。身体障害者や知的障害者に早く追いつくためにどんどん声をあげてください。

精神障害者家族会と病院長との懇談会

平成7年11月8日、石家連と石川県精神保健協会と共催で「精神障害者家族会と病院長との懇談会」が開かれました。家族、医療、保健関

係者など98人の参加があり、熱心な意見交換がなされました。分科会の司会を引き受けてくださったお二人に、感想を書いてもらいました。

心明会 八十島 信子

私は「家族会活動に関する分科会」の司会を担当しました。家族会例会の出席者をどのようにしたら増やせるかをテーマに、お互いに意見を出しあっていっそうの協力を求め合いました。出された意見のいくつかを紹介したいと思います。

- ・働いている人も参加できるように、夕方から例会を始めるなど時間帯の配慮をする。（日曜日の開催は出席率が悪かったとの意見もあった。）
- ・病気についての勉強など内容によっては多くの参加が得られる。
- ・病院の先生方に家族会の例会の参加を勧めてもらう。
- ・足の便について配慮する。

- ・会員の悩みを保健所の職員に聴いてもらう。
- ・アンケートをとって家族にどのような希望があるかを調べる。
- ・偏見は親自身にある。親が考えを変えることが必要。本人たちと二人三脚で動くことが大切。親が偏見に負けないよう強くならなければならない。
- ・きょうだいにも働き掛け積極的に参加してもらう。

以上のように貴重で活発なご意見を多くいただき、時間が足りなくなるくらいでした。今回学んだことを自己啓発にも役立て、わが子に対する接し方、考え方を考えていかななくてはと、つくづく思わせていただきました。

鳴和の里 広瀬 千恵子

精神障害者家族会と病院長との懇談会には何度か参加したことがあります。これまでは、親の立場として「一日も早く回復してほしい」と先の見えない不安からの参加でした。私自身が作業所に関わっている仲間と出会い、通所者の声、家族の声が必ずしも同じでないことを知りました。今回の懇談会に参加して、なにかヒントを得てパイプ役になればいいと思っています。

私が参加したのは「作業所・住居など社会復帰に関する分科会」でした。出された要望や意見は以下のとおりです。

- ①作業所、授産施設以外の憩いを中心とした場を行政に要望したい。
- ②指導員の質（資格の有無、指導力の有無）を考慮してほしい。
- ③医療関係者は作業所を理解し、作業内容を知ったうえで、紹介してほしい。
- ④行政（保健所）は老人の訪問のように、精神障害者にも積極的に関わってほしい。（特に独居生活者）
- ⑤病院に入院している人は、退院後の生活（食事など身の回りのこと、交通機関の利用など）に不安があるため退院につながらないこともあるので、地域での生活訓練が必要。
- ⑥退院後の閉じこもり防止のために、医療機関で保健所デイケア、相談場所の説明をしてほしい。
- ⑦市町村営住宅への精神障害者の受け入れをはかってほしい。
- ⑧グループホームがもっと必要。などまだまだ多くの意見、要望が出されましたが、私たち家族の問題が分かっただけだと思います。

当日はご多忙のなか医療機関や行政の方々においでいただきありがとうございました。今後とも、医療機関や行政から私たち家族会に対して良きアドバイスをいただきますようお願いいたします。



ワークショップ「野の花」開所後の近況報告

みそぎ会会長 佐 渡 若 男

平成7年4月に開所して、早9か月が過ぎました。作業所の生みの苦しみもさることながら、運営していく上でも、次から次と新しい問題が出てきますが、3人の指導員が関係機関と連絡をとりながら奮闘して下さっています。

最近、保健所のメンタルヘルスボランティア講座修了生の方が『野の花』に社会の風を運んで下さるようになり、メンバーも心待ちにしています。

今回は、指導員3人の中で一番若い向田生美さんに、近況報告と指導員としての思いを書いていただきました。



なにか少しでもメンバーの役に立てれば。そういう思いから始めた仕事でしたが、何もできないまま、その難しさを痛感するだけの一年だったような気がします。

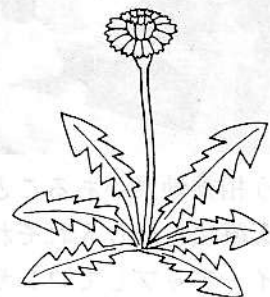
作業所に通うようになって生活のリズムがついたという人。外に仕事をみつけて、時々頑張っている姿、様子を報告に来てくれる人。心がほかのところに向いてしまい、しばらく作業所から遠ざかっている人。

メンバーひとりひとりと接しながら、そこに驚きや喜び、戸惑いや腹だたしさ、いろんな思いをして、改めて自分自身を見詰め直すいい機会ができたと思っています。

12月18日。『野の花』での作業風景、メンバーの様子を家族の人に見てもらおうということで、忘年会をかねた昼食会を催しました。

仕出し屋からとった豪華なお弁当の横には、メンバーがいつも交替でつくっているお得意の汁物。この日のメニューは、なめこに豆腐、ふかしの三つ葉を浮かべた上品なすまし汁でした。（お弁当より美味しかったという声も？…。）

家族がいることで少し緊張感が漂う食事時でしたが、続くゲーム・カラオケ大会には、「えっ、この人が?!」といったメンバーの意外な面がのぞける楽しいひとときを過ごしました。



平成7年度

北信越ブロック研修会に参加して

ひまわり共同作業所長 木 上 勇

平成7年9月28～30日の3日間にわたって長野県戸倉上山田温泉「白鳥園」で開催された家族会研修会にひまわり共同作業所の職員3名で参加した。4月就任したばかりの私は何も彼も初めての事ばかりで先輩の渡瀬指導員に引張られてやっとここまで辿りついた格構であるが、明年はこの会を石川県が担当するとの事で運営その他を是非見聞しておきたかった。

第1日目は開会セレモニーが主で主催者の挨拶、来賓の祝辞があり小憩のあと各県家族会の会員数や小規模作業所の現況、活動状況など数字を掲げて報告された。

2日目は①精神障害者の理解と接し方、②家

族会組織作りと例会運営の工夫、③社会復帰施設の作り方とその運営、④地域作業所の運営と通所者とのかかわり、の4分科会に別れて運営上の問題点や成功例を列挙して精神障害者が如何にして社会参加が出来得るか等を活発に討論した。特に本年は精神保健法の改正があり、精神障害者福祉手帳制度が施行され行政、家族会が一体となって障害者の社会復帰促進に取り組む態勢が確立され、ともすれば日陰者扱いされがちであった障害者に温かく接する為にも家族会が益々固く結ばれる必要性を感じた。得る事の多い3日間であった。

フレンズくろゆり指導員 藤 井 優 代

各県家族会活動報告、家族の対応について、社会参加について等々、盛り沢山の研修で大変勉強になりました。なかでも興味深かったのは、地域作業所と通所者とのかかわりということでの実践報告でした。各県ともそれぞれに地域の特性を生かしながら、作業（仕事）だけでなくレクリエーションを重視した所が多く、どこも明るいイメージを受けました。又、レ・クリエイトすることによって、作業の効率も上が

もありました。準備段階から、地域の方々と触れ合い、互いに理解しあい持ち味を充分に発揮したオープンな作業所作りには、とても感動しました。ご家族の方々の高齢化が進む今、少し



るという相乗効果があることも、うなずけました。音楽療法を取り入れそれが好評を得て、地域とタイ・アップしてコンサートを開く作業所



でも多くの方々の理解を得て、社会参加という考えで優しい福祉の街作りへとつなげていかなければと強く思いました。私たちの作業所がある小松の地域性を生かし、一人一人が生き生きと個性をいかしながら通える作業所であると同時に、自分自身も夢を持ちながら共に歩んでいきたいと思っています。

「全家連創立30周年記念大会」の感想

くろゆり会 木村和子

「病院長の大きな墓はあっても、
病院内で死んでいった人の墓は小さい」
「退院できる人がいるのに…」

大会を終えた今でも、発表した当事者のこの言葉は強く心に残っている。

10月31日、基礎講座「これからの精神科医療と家族のなすべきこと」に参加した。

講師の岡上和雄先生の最初の言葉は、

『「思うこと」と「思わない」とでは決定的に違う』

『患者も「希望」を持ってほしい』

希望の証明として、新薬「クロザピン」の紹介・医療のことを中心に話された。（クロザピンは、「ぜんかれん」1995年8月号にのっている）

自分の家族から「まさか？」と思うようなことがおきたときの驚き、これが「わが子か？」と疑いたくなるほどの変りように、おたおたした共通の体験を持つ家族の集まりであるだけに、この聞きなれない「クロザピン」への期待感を持ち、会場の人々はメモしながら真剣に聞き入った。日本を除く多くの先進国の医師・本人・家族に衝撃を与えたクロザピンの問題を、これからの日本の家族会が考えることは、この後に登場するであろう新しい薬の発展で、日本が再び遅れをとらないために、大変重要な1ポイントだと、しめくくられた。

先進国では7年前から既に科学的に立証されて使われているのに、なぜ、日本で普及しないのか、本人・家族の同意、認可、規制、医療問題、山積していることに気づかされた。

11月1日は、「全家連の30年とこれからの精神障害者の医療と福祉」の公開座談会と体験発表があった。

大谷藤郎・大熊由紀子・山下利政氏の公開座談会は、スライドを使いながら全家連の創立までの苦勞と、30年間の歩みを話された。

精神病院が措置入院が主で、鉄格子の中という風潮の中、昭和40年、日比谷公園で3人の話しあいから、偏見と差別をのりこえ、スタートした全家連。

1995年、法改正により「福祉」への光が見え始めたかげに、当時の方々のご苦勞があったことを始めて知った。（スタート目前に亡くなられた方もおられたとか）

体験発表は回復者として全国的に活躍なさっている長崎の山口弘美さんで、入退院8回の繰り返しの苦難の道のりのことばは、心打たれるものがあつた。そして、今の心は「誰にも分かってもらえない」という当事者が、「おたがいに話しあっているうちに、いやされ、支えあっていることに気づく」

「おたがいが、おたがいを、支えあう」

最後に、大熊由紀子氏は、全家連30年を区切りにこれからの家族会にお願いしたいことを3つ示された。（大熊さんは昭和30年朝日新聞駆け出しの記者時代から「精神病院は街の強制収容所ではないか」と言い続けてきた）

- ①家族ならではの具体的な提言を、温かいユーモアに包んで！
- ②主役は当事者であることを忘れずに！
- ③専門家・政治家・行政官と対等に話せる力量と誇りを！

行政側の障害者対策を動かすには、家族会の一層の前進をはからなくてはの思いを、強くした大会だった。



作業所紹介

ワークショップふたば

指導員 地原 照子

ワークショップふたばは、輪島市の中心河井町にあります。開所式はまだしていませんが、年令22才～48才のメンバーが通っています。指導員は3名でうち2名が非常勤です。

作業内容は、箸の袋入れ、箸のシール巻、お土産もののラベル付、輪島煎餅の台紙折りなどの作業をしています。

又、朝市が休みの毎月10日と25日に稲忠さんでミニ朝市に出させていただいています。作業所が休みの水、土、日にあたることもありますメン

バー、指導員が交代に出ることで負担が軽くなります。収益金は冬の間の賃金として還元できるため、自主製品のコースター、手作りの箸置、おしゅれタオル、石けん入玉子、レース入におい袋などを持って積極的に出ています。

去年は小旅行、ふれあいスポーツ祭、りんご狩りなどに出かけ、楽しく過ごすことができました。今年はメンバーの希望で体育館も借り、体力づくりにも力を入れたいと思います。

ワークショップすず

指導員 坪井 玉美

「ワークショップすず」は昨年11月に開所したばかりの小規模作業所です。開所当時は何によって作業収益を得るのか未定だったので、幾分不安でしたが、今は少しずつ仕事も充実しつつあります。現在の仕事内容は、海藻はがき・積木・袋物・編みぐるみなどの手芸作品作りや、電線をツイストする内職などです。いくつかの作業を、個々の特技・希望・体調にあわせて、毎日こなしています。作品は近所の店に頼んで販売して

もらっていますが、なかなか好評で作品の追加注文が入ったりして、作業所一同、大いに気をよくしています。内職は、地元の会社が理解を示し、できる範囲で頑張っています。作業の合い間には、カラオケ大会・もちつき・鏡開きのぜんざい食べ放題などを楽しみました。

今年の仕事始めの日に、1年の抱負を語り合いましたが、「ワークショップすず」を軌道にのせたい」というのは共通の願いでした。

心のふれあい講演会のご案内

「現代社会における心の健康と地域づくり」

講師 長野県精神保健福祉センター
所長 宮尾 美代子 先生

日時：平成8年3月4日(月)

午後1時～3時40分

場所：野々市文化会館 フォルテ

(石川郡野々市町本町5丁目4-1)

日程：1:00～1:30 受付、作業所作品展示・販売

1:30～1:40 開会あいさつ

1:40～3:00 講演「現代社会における心の健康と地域づくり」

3:00～3:40 ビデオ上映「支えあうなかで」
作業所作品展示・販売

〈入場無料〉

問い合わせ先：石川県精神保健福祉センター

☎0762-38-5761

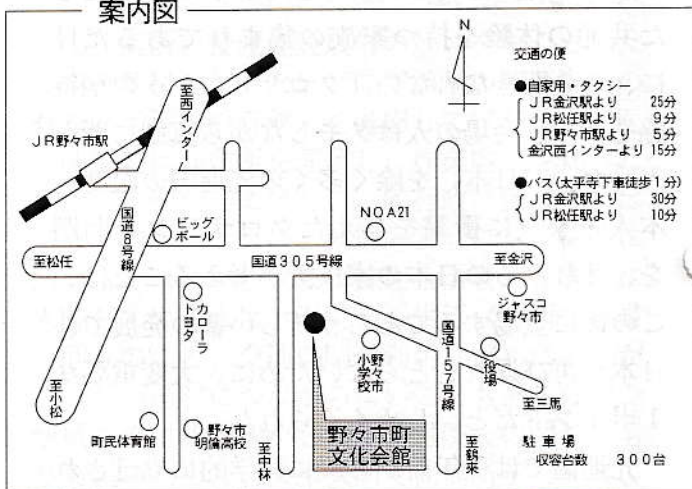
石川県松任保健所

☎0762-75-2251

主 催：石川県精神障害者家族会連合会
松任・石川精神障害者家族会
(ちよに会)

後 援：石川県
松任市、美川町、鶴来町、野々市町、
河内村、吉野谷村、鳥越村、尾口村、白峰村

案内図



編集後記

皆様からの投稿をいただき、今年度2号目の「たより」をお届けすることができました。来年度の北信越ブロック研修会は石川県が当番です。本年9月、小松市を会場にして開催準備に取り掛かっています。ご協力のほどお願いいたします。